



肝ぞう通信

第 10 号 《 肝がんの化学療法と副作用対策 》

お知らせ

肝疾患医療センターは、肝疾患に関する心配事や悩み事のご相談にお応えしています。

当院では、総合相談室が窓口になっております。

場所：病院 1 階
総合相談室

受付時間：

平日 9：00～15：00

土曜日 9：00～12：00

(第 2・4 土曜日除く)

豆知識

肝細胞がんの分子標的薬と免疫チェックポイント阻害薬による治療では、副作用マネジメントが大切です。

次回号

テーマ：

肝硬変の日常ケアについて

発行責任者

東海大学医学部付属病院
肝疾患医療センター長
加川 建弘

肝がんの化学療法とその対策

肝細胞がんは手術、ラジオ波やカテーテル治療の適応がないか転移がある場合に、以前は有効な治療がありませんでした。医療の進歩により、進行あるいは難治性の肝細胞がんに対しても、2022年2月現在6種類の分子標的薬による治療が保険適用になっています。どの治療も肝機能が良い方（チャイルド・ピューA）が原則的に実施可能な条件になっています。

①免疫チェックポイント阻害薬併用法（アテゾリズマブ：テセントリク®+ベバシズマブ：アバステン®）

：全身の免疫力を高めてがん細胞を攻撃するため、頻度は低いですが全身に免疫による副作用がでる可能性があります。問診や定期的な検査により、早期発見・早期対応を多職種・多診療科で行います。少しの変化でも医師、看護師に伝えてください。

②内服の分子標的薬（レンバチニブ：レンビマ®、ソラフェニブ：ネクサバル®、レゴラフェニブ：スチバーガ®、カボザンチニブ：カボメティクス®）

4種類の内服薬の主な副作用とその対策

- ：高血圧：定期的な血圧測定と降圧薬内服
- ：食欲不振：嘔気に対し制吐薬 食事内容の工夫
- ：下痢：止痢剤・整腸剤 食事内容の工夫
- ：甲状腺機能低下症：ホルモン補充療法(内服薬)
- ：蛋白尿：尿検査し薬物の減量・休薬
- ：倦怠感・疲れやすさ

- ：軽度では軽い運動
- ：内服治療もある

